

日がさとちよう

小川未明

青空文庫

ある山やまの中なかの村むらに、不ふしあわせな二人ふたりの娘むすめがありました。

ひとりひとりむすめ一人ひとりの娘むすめは、生うまれつき耳みみが遠とおうございました。もう一人ひとりの娘むすめは、小ちいさな時じ分ぶんにけがをして、びつこであつたのであります。

この二人ふたりの娘むすめは、まことに仲なかのいいお友ともだちでありました。そして二人ふたりとも性せい質しつのいい娘むすめでありました。

二人ふたりの女おんなの子こは、どちらふたりも十四じゅうし、五歳ごさいになつたのであります。そして、それぞれそれぞれなにかふさわしい仕し事ごとにつかなければなりませんでした。

ある日ひのこと、耳みみの遠とおい娘むすめは、びつこの娘むすめのところへやつてまゐりました。びつこの娘むすめは、いついつにないお友ともだちの沈しずんでる顔かおつ

きを見て、

「なにか心配しんぱいなことでもあるのですか？」と、やさしくたずねました。

「私は、遠いところへゆかなくてはならないかもしれませぬ……」と、耳みみの遠い娘は答えました。

びつこの娘はそれを聞いて、びつくりいたしました。二人ふたりが、別わかれるということは、どんなに、悲かなしいことであるかしれなかつたからであります。

「遠いところというのは、どこですか。」と問といました。

「東とう京きやうへ奉公ほうこうにゆくようになったのです。私は、うれしいやら、悲かなしいやら、わからないような気持きもちちでいます。」と、耳みみ

の遠い娘は答えました。

「まあ、東 京へ？ それは、どんなにしあわせだかわからな

い。私も、一度東 京へ行ってみたいと思つていますが、こん

な体では、とても望みのないことであります。あなたは、東

京へいって、にぎやかなところをぐらんなさい。しかし、後に

残された私は、さびしいことでしょう。」と、びつこの娘は、涙

をのんでいいました。

二人は別れを惜しみました。村の若い娘たちの中では、こんど

東 京へゆくようになった耳の遠い娘をうらやましく思つたも

のもありました。

ある日のこと、耳の遠い娘は、みんなに村のはずれまで見送ら

れて、いよいよ都みやこに向むかって出しゅつ発ぱつしたのであります。

彼女かのじよは、道みちすがらも、汽車きしゃの中なかも、だんだん遠とおく隔へだたつてゆ

く故郷こきようのことを思おもいました。また、仲なかのよかつたびつこの娘むすめの

ことなどをも思おもい出だして、いつまた二人ふたりはあわれるだろうかと、

悲かなしく思おもわずにはいられませんでした。

彼女かのじよは、東とう京きようにきて、一年ねん働たらき、二年ねん働たらき、三年ねんと働たらき

ました。そして、すっかり都会とかいの生せい活かつになれてしまつたのです。

その間あいだに、びつこの娘むすめからは、たよりがおりおりありました、

それもいつしか絶たえてしまいました。

しかし、彼女かのじよは、なにかにつけて、故郷こきようのことを思おもい出ださ

ずにはいられなかつたのです。あのころのお友ともだちは、どうした

ろう？　と思おもいますと、どうか、一度、ふるさとへ歸かえつてきたいものだと思おもいました。

彼女かのじよは、耳みみが遠とほいものですから、同おなじ奉ほう公こうをしましても、ほかの女おんなたちのように、どんな仕事しごとにでも、役やくにたつというわけにはゆきませんでした。それですから、したがって、もらうお金かねは少すくなかつたのです。

しかし彼女かのじよは、それをべつに不平ふへいにも思おもいませんでした。そしてこんど、ふるさとへ歸かえる時じぶん分に、着きてゆく着物きものやおみやげに費つかおうと、すこしずつなりとためておきました。

五年ねんめの春はるの終おわりのころ、彼女かのじよは、ふるさとへ、幾いく日にちかの暇ひまをもらつて、歸かえつてくることにいたしました。

り高たかいお金かねを出だして買かいました。それをさして歩あるいた姿すがたは、まったく東とうきよう京おんなの女おんなであつて、どこにも、山奥やまおくの田舎娘いなかむすめらしいところは見みえなかつたのであります。

彼女かのじよは、自分じぶんの姿すがたを鏡かがみにうつして見みとれていました。そして、いよいよふるさとに向むかつて旅立たびだつたのであります。

山やまの中なかのさびしい村むらでは、耳みみの遠とおい娘むすめが、見みちがえるほどに、美うつくしくなつて帰かえつたといつて、あちらでもこちらでも、うわさをしました。

「たいへんな、ハイカラさんになつてきた。」と、みんなは、口くち々にいいはやしたのであります。娘むすめたちは、まだ、こんなりつぱな日ひがさを見みたことがありませんから、耳みみの遠とおい娘むすめが、日ひがさ

をさして歩く^{ある}と、みんなはそのそばに寄^よつてきました。はじめのうち^めは、目を円^{まる}くして見^みているばかりで、遠慮^{えんりよ}をして、貸^かしてくれなどといったものもありませんが、日数^{ひかず}がたつて、昔^{むかし}のいっしよに遊^{あそ}んだ、耳^{みみ}の遠い娘^{とおむすめ}であつたということが、頭^{あたま}の中^{なか}にはつきりとわかると、

「私^{わたし}に、ちよつと貸^かしてくんなさい。」といつて、娘^{むすめ}たちは、美しい、うす紅^{べにいろ}色と水^{みずいろ}色の模様^{もよう}のついた日^ひがさを借^かりて、喜^{よろこ}んで、それをさしてみました。

「東^{とうきよう}京では、こんなりっぱなものを毎^{まい}日^{にち}さし、道^{みち}を歩^{ある}くだけ……。」といつて、聞^きいたものもあります。

「これから、街^{まち}の中^{なか}は、こんなパラソルがいくつ通^{とお}るか、数^{かず}えき

れないくらいだ。「と、耳みみの遠とおい娘むすめはいいました。

これをきくと、田舎いなかの娘むすめたちは、都みやこのありさまをいろいろに想そ像うぞうしました。

「それだら、たくさん、きれいなちようが、飛とんでいるように見えるだろう。」といったものもありました。

「ほんとうに、ちようが飛とんでいるように美うつくしいだろう。」といったものもありました。

「どら、おらにも、ちよつと貸かしてくんなせい。おら、生うまれて、はじめて、こんなりつばなものをさしてみるだ。」といった娘むすめもありました。

その娘むすめは、日ひがさを借かりてさしてみました。そして、仰あおぎます

と、うすい絹地をとおして太陽の光が、まばゆく、顔の上に映るような気がしました。

「まあ、お日さまが、すいて見えるだ。なんという、うすいりつぱな、羽のようなこうもりだろう。」と、ため息をもらしました。「どら、私にも貸してくんなせい。」と、村の娘たちは日がさを、たがいに奪い合いました。

そのうちに、一人の娘は、すこしでも長く自分がさしていたいとおもって、日がさをさしながら、あちらへ逃げてゆきました。

「なんだずるい。自分ばかりさして、おれにも貸してくんなせい。」と、他の一人の娘は、その後を追いかけてきました。

逃げた娘は、山道を日がさをさして駆けてゆきました。その

あとを他の娘たちは、追つていったのです。

きれいな日がさは、木の枝や、奪い合いのために切り株などに
あたって、破れました。村の娘たちは、はじめてたいへんなこと
をしてしまったと驚いて、耳の遠い娘のところへきて、あやまり
ました。

彼女は、せつかく買ってきた大事な日がさの破れてしまった
のを見て、ただぼんやりとしてしまいました。美しい日がさが破
れると、もう村の娘たちは、用事がないといわぬばかりに、どこ
かへ散つてしまいました。

「見たとこばかりきれいでも、あんな紙のようなものが、なんの役
にたとうかさ。」と、村の娘はあざ笑つたものもあります。

耳みみの遠とおい娘むすめは、急きゆうにさびしくなりました。しかし、びつこの娘むすめは、昔むかしもいまも、やさしい心こころをもっていて、すこしも変かわりはありませんでした。

びつこの娘むすめは、家いえにいて、百ひやく姓しやうをしていましたが、暇ひまをみては、耳みみの遠とおい娘むすめのところへたずねてまいりました。そして、彼か女のじよから都会とかいの話はなしをきくのを楽たのしみにしたのであります。

「ああ、私わたしは、いつ東とうきやう京きやうへいつて、そのにぎやかな光景こうけいを見みられるだろう？」と、びつこの娘むすめは、ひとりでため息いきをもらしたのでした。

そのうちに、日数ひかずがたつて、耳みみの遠とおい娘むすめは、また東とうきやう京きやうへ帰かえらなければならなかつたのです。

「わたしは、また明日、東京へ立つことになりました。」と、びつこの娘のところに来て、暇ごいを告げたのであります。

「こんどは、いつ、二人が、あわれようか……。」と、びつこの娘は、別れを悲しみました。ついに別れる日となりました。びつこの娘は耳の遠い娘を村のはずれまで送ってゆきました。

「どうぞ、お達者で暮らしてください。この日がさは、あなたに置いてゆきます。」といって、耳の遠い娘は、日がさをかたみに、びつこの娘に与えました。

二人は、そこで悲しい別れをしました。びつこの娘は、ひとり山道を歩いて帰ります途中、道ばたの石の上に腰をかけて休みました。そして、ふたたび都へ旅立っていった友だちのことを

おもいだ
思い出しながら、美しい日がさを開いてながめていました。

たちまち、青葉の上を波立っていました山風が襲つてきて、

この日がさをさらつてゆきました。びつこの娘はいつしようけん

めいであとを追いかけてきましたが、とうとう日がさは、深い谷の中

へ落ちて見えなくなりました。

しかし不思議なことに、そのあくる年からこの山には、美しい

更紗模様のついたちようが、たくさん谷から出てきました。

村の娘たちは、みんなそのちようを見て、いつか、耳の遠い娘

がさして帰った、日がさを思い出さないものはなかったのです。

また、それから幾年にもなりますが、二度と耳の遠い娘は、

ふるさとへ帰つてこないのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「週刊朝日」

1924（大正13）年7月

※表題は底本では、「日《ひ》がさとちよう」となっています。

※初出時の表題は「日傘と蝶」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日がさとちょう

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>